

書評

犀川哲典, 吉松博信 編

糖尿病と心臓病

基礎知識と実践患者管理 Q & A51

NTT 東日本札幌病院糖尿病内分泌内科

吉岡成人

日本における2型糖尿病患者は増加の一途をたどっています。2007年の国民健康・栄養調査によれば、糖尿病とその予備群は合わせて2,210万人と推計され、この10年間で1.6倍にも増加しているのです。糖尿病で問題となるのは、何といっても慢性合併症です。

糖尿病の細小血管障害の代表である糖尿病網膜症に関しては、網膜症のために身体障害者手帳1級、2級を交付される患者数は年間3,000人ほどで、この10年ほどは増加の傾向は認められません。おそらく、糖尿病診療における内科と眼科との連携の強化、治療技術の向上、「糖尿病は成人の失明原因として重要な疾患である」といった一般市民の知識の向上が、失明に至る患者数の増加を抑止している要因ではないかと考えられています。また、糖尿病腎症による末期腎不全の患者数は増加しつつありますが、透析導入に至る患者数の増加の割合は、少しずつではありますが抑えられつつある傾向にあります。

血糖値、血圧、血中脂質などの代謝指標をきめ細かく治療することが糖尿病の細小血管障害を抑止するために重要ですが、大血管障害である虚血性心疾患や脳卒中をどのように克服するかが臨床の現場に残された大きな課題です。

糖尿病患者の代謝管理をいかにして行うと虚血性心疾患の抑止につながるのか…、循環器科内科医はどのようにして糖尿病患者をマネジメントすべきなのか…、毎日の診療の現場で多くの医師たちが悩んでいます。

このような医療現場のニーズに応えるために、大分大学の循環器内科と糖尿病の診療に携わっている総合内科学第一のグループが中心となって執筆された本書は、糖尿病を専門としていない医師や医療スタッフが糖尿病患者にアプローチする際のコツを丁寧に紹介しています。

第I章では糖尿病の基礎知識を解説し、第II章で糖尿病に合併する循環器疾患がまとめられています。心房細動と糖尿病、心不全と糖尿病などの項目では、糖尿病を

専門とする医師やスタッフにも必要とされる循環器疾患の知識がしっかりとちりばめられています。

さらにどこから読んでも役に立つのが、第III章「実践・患者管理 Q & A51」です。Q & A形式で日常の診療現場で問題となるさまざまな事項について、要点を押さえた解説が過不足なく記載されています。例えば、循環器分野でのエビデンスが多いと考えられているチアゾリジン薬に関しては、薬剤の有用性のみならず、副作用である浮腫への対応や骨折のリスクについても十分に記述され、メーカーのパフレットでは推し測ることができない事実が臨床現場の視点から解説されています。肥満については、その道の専門家が多数大分大学のスタッフの手によって、実践的な記載がなされているのは言うまでもありません。もちろん、糖尿病の専門医にとっても、知識の整理のために有用なテキストです。

糖尿病患者における「血糖値」が循環器疾患をもたらすリスクなのかマーカーなのか、治療のターゲットなのか…。本書は糖尿病と循環器疾患の複雑な病態を理解するうえでの大きな助けになる一冊です。

[A5 頁 312 2010 年 定価 4,725 円(本体 4,500 円+税 5%)
医学書院刊]